❄❄❄

絶滅危惧種コーナーを出ると、次は高山植物園・ロックガーデンを周りました。大雪山系トムラウシ山八合目付近の景色を模した、およそ 90 年来の歴史ある庭園です。ここでも大体の植物は枯れかけのような状態でしたが、ヒダカミセバヤの可愛らしいピンクの花が庭園を彩っていました。

高山植物園を出て、寮歌「瓔珞（ようらく） みがく」の記念碑の前で在田さんに寮歌のメロディーを少し歌って教えていただいた後、次は博物館本館（旧札幌博物場）を見学しました。博物館の一番奥には、映画「南極物語」で有名な樺太犬タロ・ジロの、タロの剥製が展示されています。南極から帰ってきたタロは、かつて北大植物園で世話をされていたようです。参加者の中に、生きていた頃のタロと会っていたという方がいらっしゃり、博物館ボランティアもさすがに年季の入りっぷりです。実物のタロは展示されている剥製よりももう少し大きかった印象だとのことでした。剥製のタロの迫力も中々なものですから、是非、元気に動いているところを見たかったものです。

博物館を出ると、クロビイタヤの前で少し解説を行い、自然林を通り抜けてバラ園に向かいました。自然林ではトリカブトが咲いているところを見ることが出来ました。鬱蒼と茂っている自然林の中で慎ましく咲いていました。

自然林のオクトリカブト

この種類は分類が難しく、自信はありませんが、写真の植物はオクトリカブトだと思われます。バラ園では、純白の大倫のバラが花を咲かせていました。美しいバラも良いものですがバラ園での個人的なハイライトは変なタンポポです。

バラ園の変なタンポポ

タンポポの黄色い花の周りにある緑～褐色の萼のような部分を総苞と呼ぶのですが、このタンポポは総苞が葉っぱのようになっていました。果たしてこのタンポポは花を咲かせることができたのでしょうか。

バラ園を出ると、北方民族植物標本園に入り、樹木園、北ローンというルートを辿りました。植物標本園ではミヤママタタビやカラハナソウの実がなっており、まさに実りの秋といった様相でした。樹木園に入り北に進むと、道の脇に角のない丸い石が沢山転がっています。私は、歩きやすいように砂利でも敷いたのだろうと特に気にも留めていなかったのですが、それらは植物園が豊平川の扇状地であった名残りだそうです。なるほど、言われてみれば確かに川原の石のようにも見え案内役の私も学ぶことが多いといった具合です。

最後は灌木園を周りました。ここでは数十種類の低木を見ることが出来ます。ムクゲやサルスベリなどが咲いていました。灌木園を見終えた頃は日も低くなる頃合いで、さすがに肌寒い季節を感じさせるものでした。最後に、ライラック並木の前で集合写真を撮影し、解散となりました。

（前列左から二人目が筆者）

**【ボランティアニュース No. 71 追記】**

前号 p. 7 に『ポプラチェンバロ＆バロックアンサンブル「バッハと息子たち」』と題して、チェンバロボランティアの演奏会記事が掲載されました。開催日時等、記載漏れがありましたのでここに記します。

開催日時：2025 年 8 月 11 日（月）、14 時開演
場所：北海道大学総合博物館，知の交流ホール

活 動 報 告

# 第 33 回博物館押しかけよう会（赤れんが庁舎）の参加について

第二農場ボランティア　西東（さいとう）　淳

北海道の行政は 1869(明治 2)年の開拓使設置から三県時代を経て、1886(明治 19)年北海道庁の設置、建築的には 1888(明治 21)年の赤れんが庁舎の竣工、1968(昭和 43)年の創建当時の姿復原改修以来の大きな改修工事を経て、本年 7 月 25 日リニューアルオープンから 4 か月を過ぎました。今も内外より多くの来訪者に溢れかえる中、ボランティアの皆様とご一緒に「札幌観光ガイドの会」の会員であり郷土史研究者の武石詔吾さんのご案内で今一度、この機会を得て北海道開拓の歩みを確認することが出来ました。初めに 1879(明治 12)年に焼失した開拓使本庁舎跡の紹介です。

そしてこの建物、今回の改修工事は大きくは PC 鋼 176 本を煉瓦組積部に打ち込む耐震改修、屋根面・内装の解体・補修、更に設備はエレベーターの設置などバリアフリーにもある程度対応した大規模なものとなりました。私自身もここで実際の観光ガイド活動をしていた改修前には外壁煉瓦の劣化や毎年のように起きる屋根面からの室内への雨漏りなどを実感して、昭和 43 年改修から 50 年を経た重みを感ぜずにはいられませんでした。

武石さんの解説は赤れんが庁舎の歴史解説に進んでいきます。「歴史と文化のフロアー」と名付けられた部分（２階）では、特に文化財的保存状態を意識した「長官室」の歴代長官知事の解説から、隣室にあった久保守氏(1905～1992)の絵画「開拓計画を練る」の登場人物紹介は歴史的ドラマを容易に想像できる要素満載でした。これらの絵画は昭和 43 年の北海道百年記念事業工事の際に展示されたものですが、他にも田中忠雄氏(1903～1995)によるクラーク博士の「島松での別離」など北海道に縁のある画家による歴史画解説をされました。

また、「アイヌ文化と歴史の展示」の部屋では今回多く導入されたデジタル技術を使ったアイヌ文化を紹介した装置と床に広がる松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図」から、アイヌ語からの現在に至る北海道の地名に関する漢字表現の解説もありました。他にも北海道の遺産・文化を紹介した部屋も今までにはなかった展示です。

以前は立ち入り不可だった地下 1 階の「学びと継承のフロアー」の「樺太関係資料室」「北方領土展示室」などが再設置され、そこで歴史的事実に基づく日本の固有の領土である旨の説明をしていただきました。ここには普段でも多くの外国人も訪れます。１階部分の多くは観光されるお客様向けの施設としての「地域の情報とにぎわいのフロアー」です。また今回は機会を得ませんでしたが、予約制の八角塔の見学もあります。

私だけの感想かもしれませんが、少し残念なのはかつてこの階にあった北海道立文書館が江別に移ってしまったことです。しかし今回限られた時間の中で、すべてをご案内することは如何に武石さんでもかなわぬことで、ご自身が最も残念に思われていたようです。だが本来、本会は施設見学を目的とする会ですので、じっくりと学ばれる方には再訪いただければ幸いだと思います。歴史は先人たちの血と汗の積み重ねであり、この建物とともに次世代へ受け継がれるべき貴重な財産です。

開校 150 年を迎える札幌農学校・北海道大学とともに北海道とこの街の開拓を支えて来た貴重な私たちの文化資産です。今そこで、私は定点ガイドとして皆様の来訪をお待ちしております。

赤レンガ庁舎正門前集合写真（撮影は筆者）

# 着任の挨拶

北海道大学総合博物館　准教授　中沢　祐一

今年度（2025 年 4 月）より北大総合博物館に着任した中沢と申します。展示プロジェクト、講義、ボランティア活動などへ参加させていただき、忙しくも充実した毎日を送っております。

専門は、考古学と人類進化史です。考古学は大学時代に始めました。学位取得後は、様々な土地で道路やダム工事などの公共事業前に緊急に行う、遺跡発掘調査に従事していました。その間、大学の非常勤や研究会に呼んでいただいたりして、研究活動への復帰を目指していました。縁あって、10 年程前からは任期付きながらも北大で教育研究を行うことになりました。当時の所属先は医学研究科で、業績にならないけれども必要な仕事に関わっていました（詳細は割愛）。その頃、研究科長だった笠原正典先生から、「教えてもいいですよ」と言われました。講義経験が研究職を得るためにプラスになるという姑息な考えが頭をもたげましたが、かつて大学院時代にお世話になった先生から言われた、「大学にいる者が教えることは当然の義務だ」という言葉を思い出しました。

2016 年頃に 1 年生向けの全学教育課程で 1 コマだけ開講しました。私のもともとの関心が氷期の狩猟採集社会であることもあり、人類が進化してきた歴史を、文化史や世界の民族例をからめて、600 万年以上前から農耕・牧畜が始まるまでの時間を俯瞰できるような講義を企画しました。講義名はたびたび変えてきましたが、今は「人類進化史」という名称がふさわしいかと感じています。

苛烈な受験を経てきたためか、1 年生であっても好奇心の扉を閉ざしていることがあり、なるべく現代社会との関連を意識して話しました。私自身も教えながら、地球温暖化、人口増加、食料危機、グローバルサウスなどとの接点は意外とあることに気づきました。

コロナ禍以降は「人種」や「民族」の説明にも時間を割いています。ちょうど新型コロナウイルスが武漢から広がったとされたため、アメリカなどではアジア系の人々への差別や暴行が増えていました。マスメディアでは人種差別がさかんに言われていました。しかし、人種差別という言い方はそもそも正しくありません。なぜなら「人種」は昔の学者が作り出した概念であり、白色人種や黄色人種などの分類単位に実態はありません。たしかに顔の形、目や皮膚の色調、体形・体格など見た目で区別される特徴は多様で、いろいろな土地に応じて違うことはわかります。しかし、それは住み続けてきた土地の気候などの固有の環境、食事や活動に適応した結果であり、長い人類史の過程で流転する性質です。さらに現在のようなボーダレス社会ではそうした違いの程度も変わってきています。

作家の司馬遼太郎は、「兜率天（とそつてん）の巡礼」という小説の中で、「…ある数学者の計算によれば、先祖などは高が知れたもので、凡そ八百年前に遡ると、今の日本人は大てい同じ先祖になるという」と書いています。実際、最近の遺伝学的な研究からも、「人種」や「民族」として分けていたグループも、過去にさかのぼれば区別がつかないこともわかってきました。今では、「人種」を研究してきた人類学者たちも「人種」を否定しています。しかし「人種」があることを疑わない人々はまだ少なくありません。現在あるのは、（誤解に基づく）人種主義（レイシズム）だけです。

「民族」も難しい概念です。日本列島の住人は〝万世一系〟と思われがちですが、実際には様々な文化的背景をもった人々から成り立っています。アイヌや琉球の人々も独自の文化を担っており、国家ができる前から狩猟採集をしていた縄文人やそれ以前の旧石器人にも固有の文化がみられます。

分断や格差が進む時代にあって、わたしたちは多様な文化や価値観を許容できるような社会を築くことができるのでしょうか。自分自身の課題ととらえ、教育研究や博物館活動を通じて少しでも貢献できればと思います。

活 動 報 告

# 企画展「クジラの化石」展をとおしてえた博物館文化の感覚

北海道大学総合博物館資料部研究員・札幌市博物館活動センター学芸員　田中嘉寛

2025年9月12日から2026年1月25日まで、北海道大学総合博物館において企画展「クジラの化石展」が開催されました。この展示の目玉は、2025年8月に新属新種として世界にデビューしたばかりのサッポロクジラの展示です。大勢の来館者にみていただき「大きいね、スゴイ」などといっていただけたサッポロクジラは幸せな鯨の一頭であると思います。この幸せ者の鯨、略して「幸せ鯨」は北大総合博物館ボランティアのみなさんの助けを得て、ようやく来館者のみなさんの目にとまるようになり「幸せ鯨」になりました。ここでは、ボランティアのみなさんの活動を紹介しつつ、私がボランティアのみなさんから感じた「博物館文化」についてご紹介します。

2008 年に札幌市南区からみつかったサッポロクジラは岩に包まれており、割れたりしたところもありました。クリーニングという作業を通して、化石としての形がわかるようになり、研究に取り組むことができるようになるのです。ボランティアの化石グループのみなさんは、おもにサッポロクジラの体部分のクリーニングを行いました。ボランティアとしてクリーニングにたずさわった岡野忠雄さんは、北海道情報誌HO(148号，2020)のインタビューにこうこたえています。「化石クリーニングの作業をしている間は、時間がたっていることも分からなくなるくらい夢中になりますね」「どのように生きていたのか？疑問が湧いてきます」「知りたいと思うことが増えていくのが面白いですね」。化石に魅了されている様子がビシビシと伝わってきます。

化石ボランティアのみなさんと今回の企画展の設営をしました。展示ケースと展示物を並べ、サッポロクジラの復元画を印刷したタペストリーにアイロンをかけてピンピンに伸ばしていただきました。「いままでにない経験が積めて面白かったです」「サッポロクジラが有名になっていくといいですね」などのお言葉いただきました。ありがたい限りです。

企画展では、展示解説ボランティアとミュージアムマイスターコースの学生のみなさんによって、来場者への展示解説が行われました。みなさん、熱心に調べ、解説にいどまれていました。やはり「知りたいこと、調べたいことができて楽しい」というコメントをいただきました。学生のみなさんは展示の解説をとおして、解説に慣れている展示解説ボランティアや他学生の対応を参考にして自分の立ち振る舞いの仕方を工夫したり、自分の得意なことを再認識し、成長したと実感されていることが毎回解説終了後に提出されるミニレポートからうかがえました。

ここまで博物館ボランティアのみなさんの声を紹介しました。「幸せ鯨」たるサッポロクジラのデビューをとおして、私は博物館文化を生み出す方々と接する中で「博物館文化」が何か少しわかってきたような気がします。文化という言葉には様々な定義があるようですが、「人々の日常生活における行動や判断の基準」としての文化という考えが今回の経験では一番しっくりきます。

「幸せ鯨」を核に人々が集い、みて、驚き、夢中になり、調べ、面白く感じ、楽しむ。博物館の文化はこのような考えと行動によって作られていくのだろうと思いました。私もこのことを知ることができて幸せな気持ちです。

活 動 報 告

# 楽しい植物ボランティア

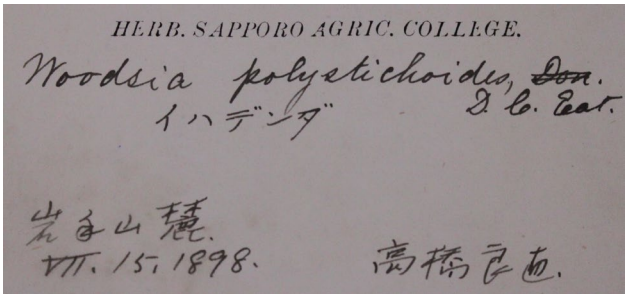
植物ボランティア　本多丘人

植物ボランティアは首藤先生の指導のもと、仲間と協力しながら新旧の未整理標本を利用できるように配架するのが主な仕事です。私が最近扱った古い標本には 1898（明治 31）年に本州で採集された十数点のシダ標本が含まれていました。当時の新聞紙にはさまれた状態で、採集年月日と採集地、採集者が記載されたラベルもありました。採集者名の高橋良直は私にはお初だったのでネットで検索してみたところ、伊藤誠哉先生が書いた「故農學士高橋良直氏略傳」（札幌博物学会会報、1915 年）がすぐヒットしました。伊藤誠哉先生といえば植物病理学、菌学が専門で稲熱病（イモチ病）防除の研究、そして戦争直後の混乱期に北海道帝国大学総長、北海道大学学長を務められた大先生として有名ですが、私としては道北の一部に分布するトリカブトの一種であるセイヤブシ（*Aconitum ito-seiyanum* Miyabe et Tatew.）、そして 10 年ほど前に函館の五稜郭を訪れた時に偶然出合った「男爵薯を讃ふ　北海道帝国大學總長　伊藤誠哉書」の石碑が印象的です。

さて、「故農學士高橋良直氏略傳」によると氏は 1872（明治 5）年札幌郡白石村に生まれ、札幌農学校を卒業後いくつかの中学校で教諭として勤務したのちに 1901（明治 34）年からは北海道農事試験場に転じ、農作物病害や小豆の育種などの研究を行って多くの論文を書かれています。しかし肺病のため 1914（大正 3）年没。享年 41 歳でした。

伊藤誠哉先生は農学校で 10 年ほど先輩の高橋良直氏の早逝を悼んで「略傳」を書かれたものと思われます。

私が「略傳」の中で注目したのは高橋良直氏が農学校卒業後、明治 30 年から明治 32 年までは岩手縣盛岡尋常中学校に勤務したことでした。偶然ですが、私の母校（盛岡第一高校）です。整理した標本の中に岩手県で採集されたものが含まれていたことに納得です。家に戻って見た高校の同窓会会員名簿には当時の教員として高橋良直の名前がありました。それと同時にわかったことは北海道とかかわりの深い歌人 石川啄木が盛岡尋常中学校に入学したのが明治 31 年だったことです。もしかしたら、啄木が北海道に来たのには高橋良直先生の影響も少しはあったのではないかと勝手な想像がふくらみます。こんなことに想いを馳せるのも、植物ボランティアとして古い標本に接したおかげです。標本の整理はジミな作業ではありますが、いろいろ楽しみがあるので続けられるのでしょう。




**高橋義直　標本ラベル　「イワデンダ」**


北海道大学総合博物館ボランティアニュース　No. 72

◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子）
◆発行人：在田一則
◆発行日：2026 年 2 月
◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel：011-706-2658
◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。
https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volueernews/